研究 覚え 書き

台密研究に携わって十余年を経過した。当初台密以外にも、希望研究テーマをいくつか抱えていた。例えば、「無我の研究」「梵文法華經の研究」「天台教学の研究」「三大秘法の研究」等々である。どれも大きなテーマであるが、日蓮仏法との関連においてこれらの研究を模索していたのである。台密を選んだのは、理由はともかく「日蓮仏法との関連において大きい意味を持つはずだ」との思いが特に強かったからにはかならない。また密教は呪術に大きく通ずる要素があり、その意味で台密研究は「人間における宗教と呪術」という別のテーマを内包しているようにも思えた。

さて私の台密研究の現状だが、これまで安然（九世紀）、仁空（十四世紀）といった極めて限られた論師の研究に忙殺されてきた。また伝教、慈覚、智証の研究にも取り組んできたが、日蓮の台密批判研究にはなかなか辿り着けない、という状況であった。これではいけないと、近年御書を繙くように努めて心がけてきたところである。

理同事勝という語の使用は日蓮が嚆矢とされて

台密研究と日蓮仏法

土倉 宏

いる。また『下山御消息』等には理同事異という語も見られる。いずれも台密批判の重要概念である。おもしろいことに、理同事異なる語は台密の仁空の書にも見られ、しかも肯定的に用いられている。それはともかく、従来、理同事勝の事柄に関心を払ってきた私であるが、御書を繙くにつれ、理事に注目するようになってきた昨今である。

台密は理同を根幹とするが、日蓮は理同を認めないのである。台密を批判する勢力には東密もあつたが、東密は法華經を二重三重の劣とするので、ある意味、台密批判は法華思想とは別の所で行われている。しかし台密が法華經を重視することを踏まえた上で、法華思想の立場から台密の理同を批判したのは日蓮ただ一人といえる。このことだけでも、日蓮の日本仏教史における位置は取り分けて屹立したものと見えるのである。日蓮の理同批判に注目しながら、これからも台密研究に取り組んでいきたい。

（つちくら ひろし／東洋哲学研究所委嘱研究員）